

## 「宮城県、統合教育推進」の記事に接して

昨日の地方紙のみならず、全国紙でも宮城県が全国に先駆けて、障害児も地域の通常学級に通える統合教育推進のために、モデル校指定のことが報道されていた。

この報道に接し、今地域の学校に通ういわゆる重症児で、しかも医療的ケアが必要な子どもへ思いがいった。その母子との出会いと経緯は、HPバックナンバ - 、福祉・教育・医療関係 ( ) P 2003.3.17. 「地域の小学校へ入学の報」に触れているのでここでは省略するが、この母の子を想う願いの第一歩が、こうした制度化への一歩にあった訳ですから、本当に良かったと思うし、母親も感慨深く読んだことと想像する。

確かにHP「思想とは、行動なりの教え(バックナンバ - 随想等関係 ( ) P 2004.12.14. : 参照)」に記載のように、現状の地域の学校が、障害児に十分対応できる人的・質的環境かどうかはかなり疑問のあることは、百も承知している。恐らく、先の母子の通う学校も、現実には、担任以外の周りの教師集団の理解・支援はどうかははなはだ疑問……。

しかし、それは周りの大人の問題であり、改善すべきことであり、親子に養護学校を薦める決定的な論拠にはならない。

それよりも、いかなる障害があれ、地域で生きていく(生活して行く)サポートを出来る教育制度、福祉制度こそが、目指すべき成熟した社会と思う。

現状からして、地域の学校に通う親子は、まだまだ心痛、苦悩を伴うであろう。しかし、先の母子のように、誰かが一步を踏み出さないことには、ことが進まないのも現実の社会である。こうした親子にどう担任教師が向き合い共に苦悩するかが問われることになる。また、担任以外の教師が十分に理解・支援する姿勢もまず問われるし、こうした問題を改善できる教育環境を整える学校の管理職や行政側の改革へ責務は必然的に生じる。

いずれにしても、まず一步を踏み出さないことには、何も変わらない。それだけに、「子どもが地域で生きるとはどういうことか」を考え、勇気ある一步を踏み出した先の母親の行動がどんなに尊いものであったか、敬服するのみである。

(中間案の詳細は、バックナンバ - 公的機関等公表資料紹介関係P「宮城県障害児教育将来構想(中間案)」からリンクできます。)

(2004年12月16日 記)